健康行動科学の病弱教育への適用

企画者　小畑文也（山梨大学教育学部）
司会者　小畑文也（山梨大学教育学部）
話題提供者　石川慶和（静岡大学教育学部）
小畑文也（山梨大学教育学部）
武田鉄郎（和歌山大学教育学部）
谷口明子（東洋大学文学部教育学科）
指定討論者　島　治伸（徳島文理大学人間生活学部）

KEY WORDS: 健康行動科学　病弱教育

【企画趣旨】

病弱児教育にはコアセオリーが存在しないが、目を健康行動科学に転じると、健康の維持増進のため多くの理論やモデルが提案されている。本シンポジウムではこれらの理論・モデルの病弱児教育への適用を探る。

【話題提供者の趣旨】

１．SOC と病弱教育　石川慶和（静岡大学）

SOC（Sense of Coherence, 首尾一貫感覚）は自分に起こる様々な出来事や環境を一貫して捉え、自分なりに筋を通しながら行動できるという感覚であり、ストレス対処や健康保持能力の概念として用いられている。SOC は把握可能感覚（自分の状況が理解できる、ある程度予想できる）、処理可能感覚（自分は何とかできる）、有意味感覚（自分にはやりがいや生きがいがある）から成り立ち、これらが高い人ほど、ストレスに対処し、健康でいられるとされる。

我が国において子どもを対象とした研究は多くはないが、諸外国では健康障害のある子どもの SOC が病気のない子どもと同等またはそれ以上であるという報告がなされている。このことは病気が必ずしも SOC、つまり健康に生きる力を低下させるものではないこと、さらには病気であるがゆえに力強く生きることができる可能性を示唆するものであり、病弱教育における支援の方向性を考える上で重要な概念となりうるであろう。

２、ヘルスエンパワメントとヘルスリテラシー　小畑文也（山梨大学）

ヘルスリテラシーとは健康問題を理解し、他人とコミュニケーションする能力であり、ヘルスエンパワメントとは、健康になろうとする、あるいは健康を維持しようとする志向性の強さを意味し、自己効力感とヘルスリテラシーとが高まることで、より強くなるとされる。すなわち「自分は健康になれる」という感覚と「どのようにしたら健康になるのか」というリテラシーの組み合わせが現実的な回復への志向性を強くすることになる。

ヘルスエンパワメントを高めることは病弱教育の目的の一つともなるが、先行研究を見る限り、子どもの場合、ヘルスリテラシーも自己効力感もこの２つのレベルは健康児と比して、若干低くなる傾向がある、この点について考察するとともにより良い教育的支援の方途を考えたい。

３．コントロール感とコーピング　武田鉄郎（和歌山大学）

ストレッサーに対して、適応過程としてコーピングを行うことにより、健康に関する能力を発達させていく。しかし、ストレッサーに対してうまく対処できずに失敗経験を繰り返すことで無力感に陥ることがしばしばある。このような事態において、子どもはストレッサーに対する認知的評価の二次的評価で、「あきらめる」という評価を行っている。すなわち、ストレッサーに対するコントロール感をなくしてしまうのである。近年、不登校等の問題を抱え慢性疾患や発達障害のある子どもたちが、二次障害として「心身症等」になり、病弱教育の対象となっている。これらの子どもたちのコントロール不能感及び消極的コーピングと、これらの事態を打開する方法の一つとしての提案・交渉型アプローチによる教育的支援の方途を考えたい。

４．病とレジリエンス　谷口明子（東洋大学）

resilience とは、物理学では「(弾力性のある物質の）弾性エネルギー」、生態学では「復元力」と訳されている。2000 年以降、教育学・心理学・社会福祉学・看護学においても現象理解の枠組みとして頻繁に参照されるようになっているが、一貫した概念定義には必ずしも至っていないのが現状である。心理学では、「かなりの悪条件のもとでも、肯定的な適応を可能にしていく動的な過程」との意味で用いられることが多く、病という大きな危機を経験する子供たちが、よりよい人生を構築することを教育の立場から支援する病弱教育との領域の整合性は高いと考えられる。

本話題提供では、レジリエンス概念の基本的な整理とともに、病弱教育においてどのように子供たちのレジリエンスを促進できるのか、その可能性について考えたい。

【指定討論】　島 治伸（徳島文理大学）

病弱教育は、継続して医療や生活上の管理が必要とされる児童・生徒が対象で、その範囲は、小児慢性特定疾患や悪性新生物によるものから、精神疾患（発達障害等の二次障害・心身症を含む）などに至るまで幅広い。また、退院後も健康を維持・管理するための指導や支援が必要なことから、他の障害のある児童生徒や障害のない児童・生徒と比較して、心理学的なアプローチを必要とすることが多い。

しかもその特性から、発達心理学や教育心理学などの分野からはもとより、健康心理学や臨床心理学に代表される領域における知見や、研究成果をもとにしたアプローチの重要性を指摘することができる。

そこで、これらの知見や研究成果が、学校教育としての病弱教育において、教科や領域を含めてどのように活かされるかどうか、また、どのようにアプローチしていくことが可能かどうかも含めて、多角的・多元的に討論をしていきたいと考えている。

(ISIKAWA Yosikazu, OBATA Fumiya, TAKEDA Teturou, TANIGUCHI Akiko, SHIMA Harunobu)